

ラグビーW杯楽しみ

9月20日に開幕するラグビーワールドカップ(W杯)2019日本大会まで約100日となった6月9日、文京区教育の森公園と文京スポーツセンターで「BUNKYO RUGBY DAY」が開かれました。

トップ選手招き 100日前イベント

2019年(令和元年)
8月27日 第7号

各面の内容

- 2、3 スポーツと音楽の祭典
- 4、5 クライミングに挑戦



7 パラ選手にインタビュー

オリンピック・パラリンピック子ども新聞は、子どもたちが記者になって取材や写真撮影に取り組み、みなさまにおどける新聞です。



ジャンピングトライを体験

ジャンプしてトライ

トヨタの松下さんと平野さん、リコーの吉村さんとふく本さんは反則のプレーなどのルールを、ボールを使ってさいげんしてくれました。よく分かる説明で、ラグビーにきょうみがわきました。

ジャンピングトライ体験ではボールを持ちながら走ってボールをこぼさないようにマットの上にジャンプしました。ラインアウト体験は2人の選手が体を持ち上げてくれて、3人目の選手がボールを投げてそれを自分がキャッチする。タックルマシンのマネキンの体をおして、力が何かあるかはかる体験もありました。ラグビーとかかわりのなかった私でもラグビーを楽しむことができ、とてもよかったです。(小5/F・S)

ルール分かります
とくべつゲストはトップリーグのリコーブラックラムズの小松大祐選手、福本翔平選手、ロトアヘア・アマナキ大洋選手、吉村公太郎選手、OBの大山大地さん、トヨタ自動車ヴェルブリッツの垣本竜哉選手、浅岡俊亮選手、高橋汰地選手、福田健太選手、OBの松下馨さん、平野航輝さん、そして元日本代表の大西将太郎さんです。大西さんは初めてラグビー観戦のコツや分かりやすいルールをしようかしてくださいました。

(小6/H・K)

ラグビーワールドカップ2019日本大会

9月20日の日本対ロシア(東京スタジアム)で開幕。20チームが参加し、全国12会場で計48試合が行われる。決勝は11月2日。



メンバー全員「かけがえのない存在」

元日本代表の大西さんは選手から解説者になったことで「一人でも多くの人にラグビーを知ってもらおう」ことに視点が変わったといいます。また、2007年ワールドカップでの経験をふまえ、いろいろな場面を想定して「きちんと準備」することが大切だと教えてくださいました。テスト勉強など私たちの生活にも当てはまる場面は多くあります。

リコーの福本選手は「チームでかけがえのない存在」についてチームのメンバー全員だと答えました。ラグビーに「One for All, All for One」(ひとはみんなのために、みんなはひとりのために)という精神があるからこそその答えでした。日本代表のみならず、20カ国・地域全ての活躍を期待したいです。(高2/K・S)

トヨタの選手に取材する子どもたち



ラインアウトでボールをキャッチ。高くてちょっと怖い

高さ3メートルでキャッチ

ジャンピングトライの体験の時、ボールの表面がざらざらしていて持

リコーとトヨタの選手の答えに共通点があったことに、おどろきました。日本でラグビー・ワールドカップが開きいされることによって、練習の方針や考え、気持ちの変化があったか聞いたところ、どちらもラグビーそのものを、もっとたくさんの人に知ってもら

見て楽しい試合を

い、日本のラグビーを盛り上げるためにも、「おもしろい、見て楽しい」と感じてもらえるようなレベルの高い試合を心がけているということです。また、そのような試合を実現できるよう日々から良いチーム作りにはげんでいるそうです。(中1/T・O)

ちにくかったです。ラインアウト体験では、プロのラグビー選手2人に持ち上げられ、ボールをキャッチ。高さが3メートルだったのでかわったです。タックルマシンはおすのがむずかしく、20センチしか出せなかったです。ボールスロー体験はラグビーボールを使い、点を取るゲームでした。点を取るのがむずかしかったけど最後50点取れたのがうれしかったです。ラグビー・ワールドカップが楽しみです。(小4/A・O)

教育プログラム
[よい、ドン!]



「IL DEVU」美しいハーモニー



IL DEVUのみなさんには、歌を歌うときに大切にしていることをうかがいました。みなさんきいている人のことを考えていて、歌詞の意味や感謝の気持ちなどを伝えることだとおっしゃいました。歌で気持ちを伝えられるのはすごいことだなと思いました。(小6/H・I)



舞台上で熱唱するIL DEVUのメンバー—毎日新聞社提供

スポーツと音楽の祭典

「JOCオリンピック教室校外編」IL DEVU&オリンピックスポーツと音楽の祭典が7月27日、文京シビックホール大ホールで行われました。私たち子ども記者はその祭典の取材をしました。体重90kg以上の大きな男性5人によるポールグループ「IL DEVU」の歌、オリンピック教室、東京2020大会を目指すフェンシングの選手の実演を見ました。(小5/N・M)

全力、友情 そして感謝



フェンシングの実演をする東莉央選手(左)と東晟良選手。後方はIL DEVUの(左から)大槻孝志さん、河原忠之さん、望月哲也さん、山下浩司さん、青山貴さん—毎日新聞社提供

オリンピックは大切な文化

本番では、IL DEVUのみなさんのえんそうがとてもすてきでした。

子ども記者は、ぶたいにも登だし、オリンピックの伊藤華英さん、大山加奈さん、小塚崇彦さん、高平慎士さんの4人から、オリンピックの授業をうけました。

私たちが選手にしようしたり、自分の意見を発表するときは、私は自分のしょうらいの夢について発表しました。きんちょううしたけど、発表した後は発表してよかったなと思いました。

司会の小塚さんは、フレンドシップ、エクスレンス、リスペクトが大切だと言っていました。フレンドシップは理解し合い、

仲間になること。エクセレンスは、ベストをつくし、がんばる心。リスペクトはフェアプレー精神、感謝する心だそうです。私は、オリンピックはとても大切な文化なんだなあと感じました。

ベストをつくしがんばる「エクセレンス」、友情を表す「フレンドシップ」、感謝する心「リスペクト」を学び、私はこれから、「リスペクト」を特に大切にしていきたいです。今回、オリンピックの備わりが分かり、興味を持ちました。いろんな選手の方が活やくできるように、応えんしたいです。今回のきちょうな体験は私の頭のアルバムの一つとなりました。

フェンシングの東莉央選手と東晟良選手はぶたいで、ルールを教えてください、実際の競技の様子を見せてくれました。はく力がありました。(小5/E・S、N・M)

△△フェンシングを実演



取材の後、東晟良選手(左端)と東莉央選手(右端)と記念撮影をする子ども記者

勝つために考えすぎず集中

フェンシング・フルーレの東莉央選手と東晟良選手に取材をしました。2人がフェンシングを始めたきっかけは、お母さんがフェンシングをしていたからです。フェンシングをしていて楽しいと感じることは、試合で勝った時や、海外へ行けること。

勝つために心がけていることは、考えすぎないことや、集中することだそうです。選手2人とあくしゅもしました。うれしかったです。私たちは、このイベントを通して、自分もオリンピックに出たいと思いました。(小5/E・S、小6/M・M)

あきらめない心

オリンピックにインタビュー



子ども記者は4人のオリンピックから、オリンピックバリュー(価値)を学んだ。毎日新聞社提供

大切なのはフェアプレー精神



オリンピックと写真におさまる子どもたち

私は、オリンピックの方たちの話を聞き、なぜ、オリンピック・パラリンピックなどに出た人がこうえん会などを開いたり、学校で話をしたりするのか、分かった気がします。

友達が世界中に

出演したみなさんにインタビューもさせていただきました。オリンピックはオリンピックに出て「世界中に友達ができた」と話していました。目標に向かうあきらめない心を持てるようになりたい、毎日楽しい日々を過ごせたり、外国で日本ではできない経験ができたりしたこともあったそうです。

試合の前などできん張する時は、自分ががんばろうとしている合図と受け止めて、いつもと同じことをするそうです。私もリラックスしたいときこのお話を思い出したいと思います。
(小5/S・T、E・S、小6/M・M)

相手を尊敬すること

競ぎにスポーツをする人は、競ぎに関わらず、みんな一生懸命ベストをつくしてがんばっています。勝ちたいし、負けたくない。けれど、試合が終わった後は、あく手したり、他の選手を応援したりしています。それは実はむしろかしくて、とても嬉しいです。勝つたいけど、他の選手にもがんばってほしい。それが、フェアプレー精神です。フェアプレー精神が無ければ、ズルやドーピングで、競ぎはぐちゃぐちゃになってしまふでしょう。ベストをつくすけど、相手をそんけいすることは、スポーツだけではなく、どんなことにも必要で、人間的にも大切なことだと思います。
(小5/N・M)

ホストタウンドイツのオーケストラ

「第9」にゾクゾク

文京区は7月13日、文京シビックホール大ホールで、来年のオリンピック・パラリンピックで文京区がホストタウンになるドイツにスポットを当てた日本×ドイツ親善交流演奏会を開きました。

演奏会にはドイツのライプツィヒ・ユースシンフォニーオーケストラ、東邦音楽大学管弦楽団による演奏に、地元小学校の合唱団も参加して「赤とんぼ」と「ふるさと」を歌いました。なじみのある曲を合唱とオーケストラできくと、新せんな感じがしました。ドイツの作曲家、ベートーベンの交響曲第9番はシビッ

親善交流演奏会

ク合唱団も加わり、ゾクゾクするくらいすばらしかったです。
(小6/K・F)

一しよに音楽を作る

東邦音楽大学管弦楽団の指揮者、上野正博さんにお話を聞きました。一番心に残ったことは、きん張の中にもアガってしまふきん張」と「アガらないきん張」があり、きん張感を持つけれど、ガクガクしないのが本当のプロだということ。オーケストラの合わせる練習は本番までに3回しかやっていないということに驚きました。「どのような方法で心を一つにしましたか」とたずねると、「先生が生徒に教えるのではなくて、

一しよに音楽を作っています」と教えてくれました。
(小6/H・I、M・M、小5/H・A)

「愛と友情」がテーマ

ドイツ人指揮者のロンドン・エントロイトナーさんにもお話を聞きました。日本に来るのは4回目、日本人については「親切で、整理ができており、前から準備する」と感じているそうです。今回演奏された曲は「日本とドイツの、お互いの愛と友情」がテーマのことでした。
(小6/S・K、Y・N)

参加国・地域と交流

「ホストタウン」とは、東京2020オリンピック・パラリンピックに向け、参加国・地域との交流を図る団体のことです。ホームステイの生徒や公式訪問団のほけん・受け入れ、文化交流イベント開催などをします。
(小6/K・F)

姉妹都市きっかけ

文京区はドイツの街カイザー・スラウテルンと1988年に姉妹都市となっていたことで、ドイツのホストタウンとなりました。カイザー・スラウテルンは、広さは文京区の約12倍(140平方キロ)ですが、人口は約10万人と半分ほどです。
(小6/S・K)

東邦音大管弦楽団 & 小学校の合唱団



子ども記者の取材を受ける東邦音大管弦楽団指揮者の上野さん(右)ドイツ人指揮者のロンドン・エントロイトナーさん(左)





三井不動産

トライして学んだこと

競技にトライして学んだことがあります。見るより実せんの方が難しいこと。視覚障害や聴覚障害の人の競技で、障害者の人の気持ちが分

かり、日々の生活が大変だと分かったこと。中田久美さん、吉田秀彦さん、荻原次晴さんの話と体験で、スポーツがひさしぶりに楽しいと思っ

スポーツクライミングに挑戦

フェンシング（F）、スポーツクライミングなどを体験しました。スポーツクライミングは、う

スポーツが身近に

東京2020オリンピック・パラリンピックまでに、オリンピックの33競技とパラリンピックの22競技、計55競技を体験するプロジェクトが「Let's 55」

全55競技を体験

自動車競技、車いすレースが印象的のりしました。自転車競技は、前輪が固定されてこ

スポーツクライミングを体験しました。手を置く石が決まってい

られるようになりました。

(小5/R・H)



子どもたちのインタビューを受ける(左から)荻原次晴さん、中田久美さん、吉田秀彦さん

柔道 吉田秀彦さん バレー 中田久美さん スキー 荻原次晴さん — 五輪メダリストに聞く

成長できるのが魅力 中田さん、吉田さんと荻原次晴さんにスポーツをやった良かったことを聞きました。

失敗をおそれない 「スポーツに大切なことは」という質問に中田さんは「失敗

もっと練習をしたい じゅうごうの強が委員の吉田秀彦さんと女子バレーボール

科学的進歩におどろき 中田さん、吉田さんがお話し



室伏さんの話を聞く子どもたち

ハンマー投げ元五輪代表 室伏重信さん

ハンマー投げの元オリンピック選手、室伏重信さんにお話を聞きました。スポーツは三つの基準で得意、不得意がわかります。



トークショーの出演者(左から)中村勘九郎さん、生田斗真さん、武内陽子、NHKアナウンサー

中村勘九郎さん 生田斗真さん インタビュー

走ることが好きに 中村さんは運動が好きではなかったのですが、マラソン

足袋をはいてみた 金栗四三が足袋でマラソン

(小6/K・F)



子どもたちの前で演奏する鼓童のメンバー

アメリカでの演奏も

鼓童は合計で37人おり、1年の中で8カ月間は3グループで活動し、残りは新潟県の佐渡島で生活しています。

文京シビックホール小ホールで3月26日、和太鼓グループ「鼓童」のワークショップがありました。

「鼓童」招きワークショップ



楽しくたたくことが大事

音を一つに

桶と太鼓という板を丸くして作った太鼓の体験をしました。たたき方によって音が全く異なり、面白かったです。

平和につながる活動

鼓童メンバーの齊藤栄一さんは、鼓童の始まりについて、「昔は太鼓の音がきこえるはん田を村と呼んでいた」と言いました。

齊藤さん自身は「変わった生活がたくて佐渡に行った。そこで初めて太鼓をたいた」とおっしゃいました。

日本伝統的楽器の一つである和太鼓は大きく二つに分けることができます。

和太鼓 迫力の響き

中に人が入れる大きさ

(中1/Y・O)

シングルマザー 社会全体でサポート

WAW!では女性活躍のテーマで、シングルマザーについての問題が取り上げられました。シングルマザーはお金だけでなく、時間もありません。少子高齢化が進み税を納める人が減り、シングルマザーの貧困家庭は十分な社会保障が受けられていません。解決策の一つとしてシングルマザーとシングルファザーが共に暮らせるマンションを作ることが挙げられました。社会全体で支えることが大切だと思いました。

(高1/Y・I)

国際女性会議

WAW! と W20

合同セッション

国際女性会議WAW!とW20の合同セッションが3月23、24日に開催され、「家族の未来 頼る・活かす・分かち合う」というパネルディスカッションの取材をしました。政治・経済・学問などさまざまな分野で活躍する方々が日本、フランス、アメリカなどから集い、熱い議論を繰り広げました。

世界の女性 輝く 社会へ



WAW!に参加した子ども記者

パネルディスカッション

女性選手の活躍アピール

スポーツの観点で「ジェンダー平等の実現」についてパネリストに質問しました。世界では「女の子だから」というだけの理由でスポーツや教育などの機会を失う子どもがたくさんいます。オリンピック・パラリンピックで「女性選手の活躍をアピールすることは、性別を問わずに平等なチャンスの機会を与える契機となり、ジェンダー平等の実現に影響をもつでしょう。2020年の東京オリンピック・パラリンピック

も、その点で大きな役割を持つことが理解できました。(大2/S・M)

選手を支える「勝ち飯」

食品メーカーの味の素は、オリンピックや全国大会などで、選手の方々に「勝ち飯」を提供しています。粉末のおみそ汁やスープなど簡単なものから「パワーボール」という小さいおにぎりまでさまざまで、フィギュアスケートの羽生結弦選手や競泳の池江璃花子選手など勝ち飯を食べる優秀な成績を収めた選手がたくさんいるそうです。(小6/K・S)

スポーツを通して人は成長

WAW!やW20が2020年の東京オリンピック・パラリンピックにどう関連するのでしょうか。スポーツと女性はとても大切なテーマで、女性も男性と同じようにスポーツをできるようにすることは大事だそうです。なぜなら、スポーツを通して人間は成長できるからです。私は、オリンピックのような国際的なイベントでさらに多くの女性が活躍し、女性も男性と同じようにスポーツができるということを伝えられたら良いと思います。(中1/T・O)

男女が互いに尊重して

日本ではあまり「男女差別」という言葉が強調されません。しかし、一歩的男女差別はなくても固定観念などは多く見られます。例えば、男性は理系、女性は文系という観念はおかしな話です。こういった観念が持たれているというのは、男女差別です。現状を改善するために、まずは人の多様性を意識し、おたがいをそんちようする必要がります。小さなことでも少しずつみんなやってみることが大切です。(小6/K・S)

外務省で事前に話を聞きました

外務省で事前に話を聞く子どもたち



WAW! W20とは

WAW!(World Assembly for Women)は年に約1度開催され、今年は5回目にして初のW20との同時開催となります。今回はノーベル平和賞を受賞し、女子教育の必要性を訴え続けるマララ・ユスフザイさんをはじめとした世界各地のさまざまな分野で活躍する女性のほか、男性の登壇もあります。ジェンダー問題を考えるにあたっては、男性の登壇者を交えたり、セッションのテーマが日常から乖離しすぎないようにしたりするなどの工夫でなりたっていることがわかりました。

(大2/S・M)

女性が持つ能力を世界で発揮

外務省女性参画推進室の松田友紀子さんは「内閣府は国内での男女共同参画の政策を行い、外務省は国際的な女性参画の推進の活動をする機関です。日本の外交や国際協力の中でも女性が持つ能力が発揮できる分野を重視していく政策を実現するために、女性分野における日本の立場を統括する女性参画推進室が外務省に設置されることになりました」と話しました。(中2/F・U)

フレックス制度で働きやすい職場に

外務省で女性の活躍を応援するために行っている活動の一つに、時間フレックス制度があります。たくさんの女性を採用したり、なるべく職場の3割以上を女性としたりすることで女性が自由に発言できるようにしています。女性のできること、できないことの固定されたイメージに左右されず、自分自身で気付き、周りに伝えていきたいです。ジェンダーギャップについて考える際には、まず自分の家族や友人など身近な場面から問題を捉えていくことの大切さを学ぶことができました。(中1/T・O、大2/S・M)

コンサート会場のロビーにはパラリンピック競技の写真が展示された



読売日本交響楽団

応援コンサート

文京シビックセンターで3月31日に「読売 東京2020パラリンピック応援コンサート」が行われました。前半は選手のトーク、後半はラヴェル作曲の「ボレロ」などクラシックの有名な曲がパリ

ンピックの映像付きで演奏されました。また、車イス利用者30人も来場し、誰もが楽しんで聴くことができるよう、声が出たり、体が動いたりしても良いようになっていました。(中1/T・O)

できることが自信になる



パラ水泳 木村敬一 選手



車いす卓球 別所キミア 選手

大事なものは
信頼関係

パラリンピック選手2人にインタビュ

コンサートが終わった後、ゲストでパラリンピック選手の、木村敬一選手と別所キミア選手にインタビュしました。

木村選手はパラ水泳の選手で、2016年リオデジャネイロ大会では、100メートルバタフライと50メートル自由形で銀メダル、100メートル自由形で、



平泳ぎで銅メダルを取りました。2歳で全盲になって、小4で水泳を始めました。コースロープやプールのかべに当たり、手に傷が多く血がでてまひするほどだそうです。

その努力で獲得した視覚障害者用のメダルは、音がるようにスチール製の球がメダルの中にはいって



ます。木村選手は銅よりも銀メダルの方が音が高く、とても気に入っています。

パラ水泳の視覚障害者グループでは、ターンやタッチのタイミングをコーチがタッピング棒で頭をたたいて知らせます。ターンとタッチの間はとても大切で、タッピング棒でたたいてももうタイミングも大事になってくるのでコーチとの信頼関係が大切だそうです。パラの競技はマラソンや水泳など信頼関係がとても大切になるものが多いと思います。

(小6/Y・K、中1/C・Y)

「オシャレ」も自慢

別所選手は車いす卓球の選手で、45歳に遊びではじめてのが上手になって4大会連続出場しています。パラリンピックでの最高順位は5位。見どころは障がいによって口にラケットをくわえたり、テープでラケットをにぎるなど残っている所をいかし一生懸命やっている選手もいるところだそうです。

別所選手といえば「オシャレ」です。かみにあみ込んだちよちよのかざりは大会の時にだけしていますが、今回はパラリンピックの応援なので大会用のオシャレをしていました。今回ちよちよは片方に20コずつでした。いままでの最大は80コ。その時は自分の年齢の数だけのつもりでしたが、係の人に「もっと」と言われ80コつけたそうです。

(小6/Y・K、中1/C・Y)

五輪競技とは違う苦労

お二人に、「えらんだ競技以外にやってみようかなと思った競技はありますか」とききました。木村選手は今まで本格的にやったスポーツは水泳しかなかったと言い、別所選手はバレーボールをやるうと思っただが、パラだとシッティングでおしりがきずつくし、テニス以外は外で寒いと考えたと言っていました。

別所選手と木村選手に「同じ種目でも、オリンピックの選手とは違う、どのような困難があるのか」も聞きました。別所選手は「車いすで体がとどかない所があるため、いかにどう動くかが勝敗につながる」とおっしゃっていました。木村選手は「前が一切、見えないのでかべにぶつからないようタッピング棒を使う練習などがオリンピックの選手とは違う部分だ」とのことです。また、両方の競技ともルールがオリンピックとは違うそうです。

「それぞれのスポーツのやりがいは」という質問に、別所選手は「たとえ障がいがあっても、できるということが、自信になります」と答えてくださいました。また、「パラリンピックの見どころは」という質問に、「障がいがあることも、こんなにできるんだ！と感じることができると思います」と、木村選手が答えてくださいました。私はパラリンピック選手は「障がいなんて関係ない」と思っているのではないのかと感じました。

今日、二人の選手に取材し、コンサートを聴くことができ障がいのあるなしでかべを作らないことが大切だと学びました。

(中1/C・Y、小5/N・M、中1/T・O)

クリスマスマーケット

区内で12月に開催
文京クリスマスマーケット2019を、12月13、14日に文京区で行います。
本場ドイツにならって、グリーワインと呼ばれるホットワインやソーゼージなど伝統的な飲み物、食べ物をご用意。手作り品やクリスマス飾りなども販売します。
さらに、会場にはドイツゆかりのオリンピック・パラリンピアンを招きます。スポーツについての話や競技体験を通じてドイツを感じましょう。
13日は夕方から、14日は午後開催予定。

オリンピックらを招待



▲ 本場では華やかな飾りがマーケットを彩る



フランクフルトのクリスマスマーケットで

ドイツホストタウン情報

文の京・ドイツ文化講座 第6回

日時 10月19日(土)午後2時から4時まで
会場 文京シビックセンター5階区民会議室
講師 持田節子氏 (ドイツビジネススクールWHU—Otto Beisheim School of Management元講師)

対象 文京区内在住・在勤・在学者

定員 50人(超えた場合は抽選)

受講料 500円

講座概要 ドイツで32年間の教員生活(大学講師)の傍ら、日本事情を紹介する講演やビジネスセミナーの講師を務めた持田氏が「食」について語ります。

申込方法 9月10日(火)から往復はがき又はメール(件名に「ドイツ文化講座第6回申し込み」と記載)に住所(在勤者は勤務先・所在地、在学者は学校名も記載)・氏名(ふりがな)・生年月日・電話番号・メールアドレスと、はがきの場合は返信用にあて先を明記し、〒112-8555 文京区スポーツ振興課オリンピック・パラリンピック担当へご応募ください。☎03(5803)1309 メール:b-dondon@city.bunkyo.lg.jp

締め切り 10月10日(木) 必着

※詳しくは区のホームページをご覧ください。
URL: <https://www.city.bunkyo.lg.jp/bunka/olympic/bunkyooplan/hosttown.html>



持田節子さん

ドイツ語入門講座 下半期スタート

10月からドイツ語入門講座をスタートします。今回は「文法から学ぶドイツ語」と「会話から学ぶドイツ語」の2コース。どちらか一方でも、両方でも受講することができます。

講師のシュナイダー・パトリックさんもグリットナー・ミリアムさんも日本語が堪能です。初心者の方も安心して学ぶことができます。言語だけでなく、毎回、ドイツ文化の一面を紹介し、皆様の質問にお答えします。

対象 18歳以上の在住・在勤・在学者
定員 各25人(超えた場合は抽選)
受講料 7500円(別途教科書代、当選者に詳細をお伝えします)
申込方法 往復はがき又はメール(件名に「ドイツ語講座下半期申し込み」と記載)に希望のコース・住所(在勤者は勤務先・所在地、在学者は学校名も記載)・氏名(ふりがな)・生年月日・電話番号・メールアドレスと、はがきの場合は返信用にあて先を明記し、〒112-8555 文京区スポーツ振興課オリンピック・パラリンピック担当へご応募ください。☎03(5803)1309、メール:b-dondon@city.bunkyo.lg.jp

締め切り 9月13日(金) 必着

文法から学ぶドイツ語講座(全15回)

講師 シュナイダー・パトリックさん(文京区国際交流員)

日程 10月8日・15日、11月5日・12日・19日・26日、12月10日、1月14日・21日・28日、2月18日・25日、3月3日・10日・17日

曜日 火曜日

時間 午後6時半から8時半まで(当日の状況で多少変動あり)

場所 文京シビックセンター3階区民会議室



パトリックさん

会話から学ぶドイツ語講座(全15回)

講師 グリットナー・ミリアムさん(公益財団法人日独協会)

日程 10月9日・16日・23日、11月6日・13日・20日、12月11日・18日、1月8日・15日・29日、2月5日・12日・19日、3月4日

曜日 水曜日

時間 午後6時半から8時半まで(当日の状況で多少変動あり)

場所 文京シビックセンター3階区民会議室



ミリアムさん

※日程は変更の場合があります。

詳しくは区のホームページをご覧ください。URL: <https://www.city.bunkyo.lg.jp/bunka/olympic/bunkyooplan/hosttown.html>